



前進、漸進

公益社団法人成年後見センター・リーガルサポート

理事長 高橋 隆晋

1. はじめに

各地で自然災害が多発する中で迎える令和7年。新しい年のスタートに当たり、まずもって皆様の息災を心からお祈り申し上げたい。

リーガルサポートは、令和6年12月22日に設立25周年を迎えた。12月6日の設立25周年記念シンポジウム、記念式典及び祝賀会では、大変多くの方々からお祝いと共に激励の言葉を頂戴した。この場をお借りして、共催していただいた日本司法書士会連合会及び師走のご多用の中ご臨席いただいた全ての関係者に厚く御礼を申し上げたい。

令和7年はリーガルサポートの新たな歴史を刻むスタートの年となる。現在ある成年後見制度や法人運営の大きな転換期を漸進的に乗り越え、社会の要請に応える法人であり、かつリーガルサポートで活動する会員が誇りと幸せを実感できる法人を目指して前進していきたい。

2. 組織は人なり

2年前のリーガルサポートニュースへの寄稿の機会に「新たな一步を踏み出そう」と呼びかけさせていただいた。時は、長引くコロナ禍。事業活動が大幅に制限され、本部支部間、あるいは支部内部での人的交流が断絶された。会員の孤立が長期化することによる心理的距離の拡大が組織への帰属意識の低下を招き、ひいては法人運営の萎縮が最も懸念された時期だった。そうしたことを踏まえ、対面によるコミュニケーションを取り戻すことに力を注いだ。

こうした時期を経て開催された令和6年度ブロック会議は、集合形式が主となった会議と懇親会を通じて従来の活気を取り戻しつつある流れを実感した。令和7年は、こうした流れを加速させ、事業活動を通じて地域の権利擁護支援の更なる推進に寄与していきたいと切に願う。

一方で、役員のなり手不足等がリーガルサポートの目下の課題であることも、各ブロック会議で共通して上がってくる現場の声から十分に承知している。この課題を解決するために、現場のご意見やアイデアをいただきつつ、組織を支えるのは人であり、その共通認識にたつて次代を担う人を大切に育ていけるよう取り組んでいきたいと思う。そのアプローチに特効薬はなく、地道な取組を重ねていくことになるだろうが、その間も前進するマインドだけは失わずにいたい。

3. 権利擁護支援の更なる推進に向けて

超高齢社会が進展する我が国は、かねて2025年問題が提起されてきたが、令和7年はいよいよその年を迎える。認知症は高齢になるほど罹患率が高いとされ、団塊の世代が後期高齢者となる2025年以降、ますます成年後見制度を利用した認知症高齢者の権利擁護支援のニーズは増していくことだろう。

そうした状況下、現在進められている国の第二期成年後見制度利用促進基本計画（以下、「第二期計画」という。）は、中間検証を踏まえ5カ年計画の後半期に突入していく。第二期計画では「全国どの地域においても、制度の利用を必要とする人が、尊厳のある本人らしい生活を継続することができる体制整備を目指す」ことが掲げられており、私たちは「全国どの地域においても」に対応できる組織の基盤を活かして地域共生社会の実現に向けた権利擁護支援の推進に尽力していくことを改めて確認したい。

成年後見制度の見直しは、令和6年4月から法制審議会民法（成年後見等関係）部会での審議が継続しており、リーガルサポートからは野村真美常任理事が幹事として参加し実務の現場を踏まえた意見を述べているところであるが、令和7年は、中間試案が示されパブリックコメントに付されるなどの大きな動きが予定されている。

成年後見制度の運用改善及び仕組みの見直しの両面から「利用者が使いやすい、メリットを実感できる、そのことによって尊厳ある本人らしい生活の継続と地域社会への参加を図る権利擁護の推進」が図られるよう、関係諸機関と連携して取り組んでまいりたい。

4. 後見の総合センターに向けて

令和7年4月から、未成年後見事業が本格的に開始する。リーガルサポートでは、現在、未成年後見人候補者及び未成年後見監督人候補者の各名簿の登載申請の受付を行っている。全国の会員及び司法書士会会員の皆様には、未成年者の権利の擁護と福祉の増進に向けた新たな取組に積極的にエントリーしていただくよう重ねてお願い申し上げる次第である。

事件数や実務の経験値は、成年後見のそれと比べるべくもないが、この一步は、未成年者のみならず、リーガルサポートにとっても後々、後見の総合センターとして踏み出した意義ある一步だったと振り返られるに違いないし、そうあらねばならないとも思う。

成年後見の分野に、手探りながら一步を踏み出した26年前と同様、全国の仲間と共に力を合わせて確実な足取りで進んでいきたい。

5. むすびに

昨夏、理事長職を拝命して初めてのプライベートな旅で、念願の別所温泉（長野県）を訪れた。池波正太郎の「真田太平記」に登場する重要な舞台の一つである彼の地で、早朝の湯上りに散歩する途中、蟬時雨に打たれながら作中の次の言葉を考えていた。

「人という人は、自分（おのれ）のために生きるのではないぞ。自分の無事を願い、自分のためにつくしてくれる他の人びとのために生きねばならぬ。生きぬかねばならぬ。これが人というものじゃ。」

自らが選んだ好きな仕事を通じて、社会や助けを必要とする他の人の役に立てることは幸せなことだと思う。リーガルサポートという舞台でそれを実現できるよう、共通の目的の下に集う全国の会員と協働していきたいと思うし、その活動を通じて、会員一人ひとりが、誇りとやりがいと幸せを実感できるよう一体感のある法人の運営に取り組んでいくことをお約束して令和7年のスタートとしたい。